

2. 研究の詳細

プロジェクト名	自然とつながる感性を育む幼児教育実践の体系化への試み		
プロジェクト期間	平成 25 年度		
申請代表者 (所属講座等)	笠原広一 (幼児教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	
1. 研究の目的 幼児期の教育は、自然とのふれあいといった人間の原体験となるべき豊かな生活体験が重要となる。自然とのつながりを感じるということは、主に幼稚園教育要領における領域「環境」において扱われることが多い。幼稚園教育は「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域が相互に関連しながら展開されるため、他領域との関連の中で自然体験を捉えていく視点が重要である。そこで本研究では、幼児期の生活体験の基本である遊びと親和性が高く、同時に生活文化を創造的に形づくる領域「表現」との接点において、自然とつながる感性を育む幼児教育実践の体系化を試みる。 領域「表現」は芸術や生活文化につながっており、日本人は古来、自然の良さや美しさを感じ取って生活の中に様々な表現の形で取り込んできた。そうした日本の生活文化や表現に取り込まれてきた自然と感性の関係を、幼児期に望ましい生活体験として取り入れることが、「表現」との関連においてどのように可能かを模索し、その見取り図(体系)を描くことが研究の目的である。それによって日本固有の自然とつながる感性を育む幼児教育についての研究を進める領域統合的な足場ができ、自然とつながる感性を育む幼児教育実践の理解と方法が豊かになると考える。 2. 研究の内容 (1) 自然と感性を軸にした保育カリキュラムの仮説づくり 自然と感性の接点を持つ保育実践の類型を幼児教育実践の中から抽出し、自然と感性を軸にした保育カリキュラムの全体イメージの仮説を立てる。 (2) 造形表現による自然と感性についての実践的な調査 自然や地域を題材とした造形活動の実践から、表現活動をととした自然と感性のかかわりの実践を調査する。 (3) 自然と感性を統合的に扱う先駆的な幼児教育実践の事例調査 自然と感性を統合的に扱った優れた保育を行っている先駆的な幼児教育実践について、フォーラム等の参加による情報収集や、フィールドワークでの調査を行う。それらを分析し、(1)(2)の成果とあわせて保育カリキュラムの仮説及び、造形表現による自然と感性の統合的な保育実践についての構想をまとめる。 3. 研究成果 (1) 自然と感性を軸にした保育カリキュラムの仮説づくり 自然と感性の接点を保育実践の中に見出し、その類型を以下の6つのレイヤーとして整理した。持続可能な自然と人間の共生を基礎とした生活文化が、自然と感性を統合した幼児教育実践の鍵となると言える。人間存在の基盤は自然環境にあり、自然に根ざした環境の中に暮らしの文化がある。 ・レイヤー1: 四季の中での自然の移り変わりをを感じる野外体験 ・レイヤー2: 農業や飼育栽培による「自然・農・食文化」等の活動 ・レイヤー3: 野外での体験や遊びから感じたことの表現活動 ・レイヤー4: 自然や四季のテーマでの表現活動(歌・ダンス・劇・絵画・工作等) ・レイヤー5: 自然や四季に関連した行事や歳事の取り組み ・レイヤー6: ESD に根ざした環境教育プログラム 自然とつながる感性が豊かに育まれる契機が有機的に繋がった保育実践の構成要素が6つのレイヤーによって分かりやすく捉えることができる。これが自然と感性を軸にした保育カリキュラムの全体イメージの仮説となる。次にそれらを有機的・統合的に扱える幼児教育実践のあり方や保育内容のデザイン手法を明らかにする必要がある。 (2) 造形表現による自然と感性についての実践的な調査 自然や地域を題材とした造形活動の実践から、表現活動をととした自然と感性のかかわりを実践的に調査する。そのために、「福島県立美術館 親子の美術教室」での郷土人形づくりの実技教室、「九州保育研究会大会」での保育実践講習、本学で担当する講義・演習等での自然と関連する授業内容の分析を行った。			

①福島県立美術館 親子の美術教室

実施日:2013年9月22日(日)10:00-15:30

場所:福島県立美術館 美術館実習室

講習名:親と子の美術教室 小さな張り子をつくろう!

ー「東日本大震災復興支援特別展 若冲が来てくれました プライスコレクション江戸絵画の美と生命」ー関連イベント
参加者:小学生と保護者10組、大人2名

内容:東日本大震災の被害を受けてアメリカのプライスコレクションが復興支援の巡回展を福島県立美術館で開催することとなった。そこで、作品にある伊藤若冲の伏見人形(京都の郷土人形)をテーマに、張り子で有名な福島の郷土人形づくりを親子で行うこととなった。その土地の自然の素材で作られた張り子制作を通して、古来の人々の願いを知り、未来に継承すべき郷土の自然や文化、暮らしのあり方を考える体験となることを意図して取り組んだ。

まず、若冲の伏見人形(京都)から全国に広がった各地の郷土人形(九州:古賀人形、岩手:花巻人形、仙台:堤人形、福島:根子町人形と三春張子)等を紹介し、そこに込められた人々の願いや造形について講義を行った。その後、作例を示しつつ制作手順を説明し、各自が一つ自分の張り子制作を開始した。

型に和紙を貼り重ね、乾燥させて下地を塗り、最後に着色する。どんな絵柄にするかをそれぞれに考えてもらった。完成後に来日中のプライス財団のプライス夫妻と共に鑑賞の時間を持った。張り子には一つひとつに、「田んぼでお米がたくさん穫れることを願う魚の張り子」や「自分に元気をくれる犬の張り子」「月や太陽、星が体中に描かれた犬や魚の張り子」など、自然や宇宙、命と自分とのかかわりなど、様々なテーマや願いで制作された。

佐藤(1997)によれば「日常生活の中における造形的価値」「多文化教育(異文化教育)の原点」「地域における人間形成と学校の活性化」の三つが地域の伝統的造形の教育的意義であるとする。郷土の自然や風土といったものの価値に気付く感性とは、日常生活の中における造形体験との生活経験が重要であり、それは「素材の性質を生かす知恵」や「こめられた作者の思い」などを「身を以て学ぶことになり理解を一層深める」とし、「日常生活を通して何気なく子どものころから育んできた美意識」が、「底辺から人間の行動を支え、価値判断の基準を形成している」と述べる(1997:134)。こうした地域の自然素材やものづくりを通した伝統的な造形活動は、十分にこうした体験を深める取り組みになりうると考える。

郷土の自然とつながる感性とは、「何気なく醸成され育まれるもの」である要素があり、成果がすぐには測りにくいものである。しかし、幼稚園や学校、社会教育といった、学校と地域を繋ぐ多元的でかつ時間軸でつながった、地域の自然や風土をテーマとした体験活動が、自然につながる感性を「何気なく醸成する」ことにつながり、人間形成としての地域の生活環境を形づくりに繋がるという仮説を立てることができよう。

佐藤昌彦(1997)「地域の伝統的造形と鑑賞教育:小学校における昼花火の実践と理論的考察」『美術教育学』美術科教育学会誌 (18) 125-136.



図1 制作風景



図2 型に和紙を貼りこむ

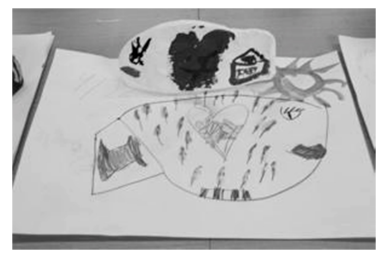


図3 下絵を完成した張り子

②九州保育研究会第七回大会での保育実践講習

実施日:2013年11月17日(日)13:00-15:00

場所:本学幼児教育演習室

講習名:園の生活環境構成につなげる造形活動

ー自然体験と自然物を活かした造形活動とそれを活用した環境の構成ー

参加者:九州地区の幼稚園教諭及び、同地区内養成校の学生(30名)

内容:最初に幼稚園での自然体験や自然物を対象にした保育内容についてレクチャーを行った。自然を園生活

に取り入れ、有機的・統合的に生活体験に形づくる保育カリキュラムの必要性和そのあり方について、Reggio Emilia市の幼児教育等を例に説明した。次に、自然物を生活環境に取り入れる際の具体的な方法について意見を交わした。意見として多いのが、野外に自然物を拾いに出かけ、それを何かに見立てて工作をするという活動が、自然と領域「表現」との関連では一番イメージされやすく実践もされやすい現状であった。

そこで、参加者と屋外を散策し、何かの形にみたてて工作をするための材料として自然物を捉えるのではなく、「散策する中で感じたことや発見したことを他者に伝えるための表現」をグループで行ってもらった。初めに五感を意識して音を聴き、匂いや空気、光を感じるための簡単なアクティビティを行った。当初は何をどう感じてよいか分からないといった声も聞かれたが、太陽光を受けて光る蜘蛛の糸の美しさや、そこに引っかかって中に浮いたように見える葉っぱがあちこちに浮いている様子、落ち葉の色のグラデーションの美しさや、光が透過した木々の緑の美しさなど、感じたことが様々に報告された。グループでその「感じ」を表現するための造形活動を行って発表してもらい、参加者間でイメージを共有した。

この実践から見えてきたことは、とりわけ領域「表現」においては自然物を造形のための材料と捉えるイメージが強く、自然体験の中で感じたことを表現するというテーマ自体が、馴染みが薄いということである。例えばそれは、森で種を見つけたとしても、そこにどのような花が咲くのか、種は地面に落ちてどのように育っていくのか、種の形や栽培してみるといった方向への展開よりも、この種はコラージュ制作で動物の目の部分に使えるかもしれない、といった発想に流れやすいということである。感じることに、感じさせる支援方法そのものが漠然としており、具体的な形象の造形にすぐに結びつけてしまい、それ以外の発想に広がる支援方法がイメージされにくいことが分かった。自然体験と表現活動とのより広い接点を持った実践を引き出せることが重要であるが、本講習でも課題は多いと感じた。

結論としては、自然との接点を有機的・統合的に扱う表現活動という幼児教育実践への具体的な方法を開発する必要があることが分かった。



図4 講習風景



図5 グループワーク



図6 葉の色の違いについて

③担当する講義・演習等での内容分析

表現系演習での自然環境との接点から、学生自身が改めて自然と出会うきっかけとなる体験と幼児教育との接点についての学びのあり方について分析を行った。対象は「幼児の表現研究Ⅰ」(1年次)、「美術表現の指導法」(3年次)、「幼児・児童のための教材研究」(3年次)の3科目である。



図7 学生による教材例



図8 植物の観察画



図9 学内の散策

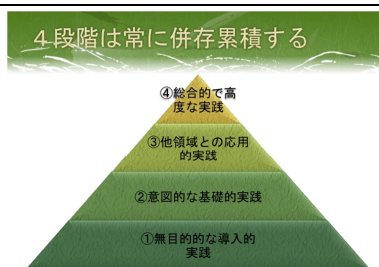


図 10 自然体験と感受認識の類型

図 11 自然体験の学習深化の段階

図 12 学習深化の累積構造

3科目の中に含まれる自然体験と関連がある演習内容について学生の体験や生成物等の内容を整理すると、自然体験には、「自然そのもの」と出会うものから「他領域と関連」した出会い方(縦軸)があり、さらに「非意図的」な体験と「意図的」な目的志向の体験がある(横軸)(図10)。その中に「①無目的的な導入的実践」「②意図的な基礎的実践」「③他領域との応用・統合的実践」「④総合的で高度な実践」の類型があり、それは①から④へと累積的な学習構造を持つことが分かった。領域「表現」においては①の「無目的的な導入的実践」における感性の働きが基礎的体験となるが、この領域における十分な体験の上に②から④を積み上げなければ、体験的な感性の働きとつながった自然体験や理解は育まれにくいと考える。幼児期の体験に相応しい各段階に応じた指導方法の整理と、効果的な体験学習方法の開発が必要である。

以上、(2)造形表現による自然と感性についての実践的な調査から分かったことは、領域「表現」においては造形活動のみならず、その基底体験となる自然散策等での「感じること」そのものに難しさがあることが分かる。感じるための体験方法は様々あるが、同時にそうした手法にとらわれずに素朴に感じる感性の働きを意識することが重要となる。様々な体験や感じたことや発見を形にする方法を見出していく必要があるわけだが、既成の実践例のイメージも強く、幼児児童が感じたことをキャッチする柔軟性と、そこから体験と表現の統合へとつなげる実践イメージの形成と手段の豊富化が求められる。そうした感性と実践力を獲得できる方法を演習のなかで試みていく必要があることが分かった。

(3) 自然と感性を統合的に扱う先駆的な幼児教育実践の事例調査

自然と感性を統合的に扱った優れた保育を行っている先駆的な幼児教育実践について、情報収集やフィールドワーク調査を行った。

①京都・環境教育ミーティングでの情報収集

持続可能な開発のための教育(ESD)についての講演と各種研究発表を聴講した。日本の自然観を暮らしの中に具体的な生活文化の形態として見出して整理した研究(新田 2014)や、森のようちえんに関する幼児教育と自然体験の実践例報告(木村 2014)(前田・安田 2014)など、自然とつながる感性を生活文化と幼児の園生活との関連で理解する上で示唆に富む発表を聞くことができた。また、筆者も「幼児教育を学ぶ大学生の自然を感じる体験について—芸術系表現演習での取り組みから—」の発表を行い(笠原 2014)、有意義な情報交流が出来た。この 10 年間の ESD の取り組みが、次第に生活文化や幼児教育といった領域にも繋がってきていることが分かった。一方、ESD の普及や自然と感性が繋がった幼児教育実践の分かりやすい具体的方法が必要である点が課題であることが見えてきた。

新田章伸(2014)「日本の自然観 最新研究発表 ～自然体という生き方～」『京都・環境教育ミーティング』京エコロジセンター 42

木村太郎(2014)「森のようちえんの運営とシステム」『京都・環境教育ミーティング』京エコロジーセンター 48

前田浩志・安田有美(2014)「実習生のホントのどこ～実習生をすると一体何が手に入るのか?～」『京都・環境教育ミーティング』京エコロジーセンター 49

②メルボルン大学アーリーラーニング・センターのフィールドワーク調査

自然と感性を統合的に扱う優れた幼児教育実践の事例調査として、メルボルン大学アーリーラーニング・センター(ELC)の調査を行った。ELCは幼児教育カリキュラムの基本に芸術を据える、Arts Based Approachを採用している。自然環境、自然体験や自然現象について、「観察」「五感での体感」「思考の視覚化」「アイディアの視覚的共有化」「観念と現象理解の提示」といった芸術の表現活動を通した手法によって、体験的に学習活動を構築している。「感じる」といった感性的体験過程と、「考え」「アイディアを生み出す」といった認知的思考過程を、実際に五感や表現プロセスを通して統合的に実践に組み入れている。

今回の調査時は「Family Farming」をテーマに、園と家庭での野菜の栽培に取り組み、その過程での種や葉、実などの観察や種類の比較などはもちろん、根(Root)や水(Water)が大地に根ざし、地球環境内を循環していることを小さな現象から想像していくことや、絵画や工作等の造形だけでなく、歌やダンスなど様々なメディアを駆使して全体的(Holistic)な実践体系を形づくっていることが分かった。自然とつながる感性について、自己表現と感性的な側面だけでなく、認知的・理性的な側面をも統合した、自然体験、ESD、環境教育の具体的な実践事例を観ることができ、自然とつながる感性を育む幼児教育実践の具体的なイメージを得ることができた。

また、同大学附属チルドレンズセンターや、メルボルン市内にある森のようちえん(Bush Kinder Garden)の見学も行い、園内の自然環境と遊びの関連や、雨水タンクなどの環境教育の取り組みなどを見ることができた。



図 13 ELC の保育風景



図 14 プロジェクトでの作品



図 15 様々な植物の種

【まとめ】

自然とつながる感性を育む幼児教育実践の体系化について「(1) 自然と感性を軸にした保育カリキュラムの仮説づくり」において6つのレイヤーによる日本の保育内容の構成が整理できた。「(2) 造形表現による自然と感性についての実践的な調査」については、張り子制作、保育実践講習、講義・演習の分析から、具体的な実践内容のデザイン方法についての試行を経て、図に示した「自然体験と感受認識の類型」「自然体験の学習深化の段階」「学習深化の累積構造」といった実践のデザイン原理と学生の体験学習の構造を見出すことができた。ここでの課題である、実践のより具体的な手法の理解については、「(3) 自然と感性を統合的に扱う先駆的な幼児教育実践の事例調査」において、京都・環境教育フォーラムで得た先駆的事例や自然観理解を参考に、具体的な実践原理と方法については、ELCのArts Based Approachの調査が多くの示唆を与えてくれた。こうした調査研究によって、自然とつながる感性を育む幼児教育実践の体系化のための、フレームワークと具体的なコンテンツのレイアウトが大分はっきりと見えてきたと言える。

以上、本プロジェクト研究の成果をふまえ今後より具体的な幼児教育実践の体系づくりを進めていきたい。

4. 研究成果の公表

①笠原広一 (2014)「郷土人形づくりをとおした自然と感性のつながりの探求-親子の張り子づくり教室の実践から-」福岡教育大学紀要第63号 第四分冊 73-86

②笠原広一 (2014)「幼児教育を学ぶ大学生の自然を感じる体験について-芸術系表現演習での取り組みから-」京都・環境教育フォーラム 京エコロジーセンター 於：龍谷大学 50 (口頭発表 2014.3.1)

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。